

鷲目二貫文、武蔵房円日を使にて給候了。

人王三十六代皇極天皇と申せし王は女人にてをはしき。其時入鹿臣と申者あり。あまりのをごりのものぐるわしさに王位をうばはんとふるまいしを、

天皇・王子等不思議とはをばせしかども、いかにも力及ざりしほどに、
大兄王子軽王子等なげかせ給て、中臣の鎌子と申せし臣に申あわせさせ
給しかば、臣申く、いかにも人力はかなうべしとはみへ候はず。馬

子が例をひきて教主釈尊の御力ならずば叶がたしと申せしかば、さらばとて
釈尊を造奉ていのりしかば、入鹿ほどなく打にき。

此中臣の鎌子と申人は後には姓かへて藤原鎌足と申、内大臣になり、大職冠と申人今の一の人の御先祖なり。此釈迦仏は今興福寺の本尊なり。されば王の王たるも釈迦仏、臣の臣たるも釈迦仏。神国仏国となりし事
ゑもんのたいう（右衛門大夫）殿の御文と引合て心へさせ給へ。今代は他国
にうばわれんとする事、釈尊をいるがせにする故なり。神の力も及べからずと
申はこれなり。

各々二人はすでにとこそ人はみしかども、かくいみじくみへさせ給は、ひとへ
に釈迦仏・法華経の御力なりとをばすらむ。又此にもをもひ候。後生のた
のもしさ申ばかりなし。此より後もいかなる事ありとも、すこしもたゆむ事な
かれ。いよいよはりあげてせむべし。たとい命に及とも、すこしもひるむ事な
かれ。あなかしこあなかしこ。恐恐謹言。

八月二十一日 日蓮 「花押」

兵衛志殿 「御返事」

定本番号:254

祖寿:56

系年:建治3(1277)

対告衆:

著作地:身延

真蹟:京都 立本寺

写本:

分類:A 真蹟現存(完存orほぼ完存)